

～健口と輝く笑顔のために～ JAPAN DENTAL HYGIENISTS' ASSOCIATION 歯科衛生だより

2021 December vol. 66

発行人／吉田 直美
発 行／公益社団法人 日本歯科衛生士会
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-11-19
TEL.03(3209)8020 FAX.03(3209)8023
<https://www.jdha.or.jp/>

日本歯科衛生学会 第16回学術大会

新しい日常を支える口腔健康管理

主催：日本歯科衛生学会／公益社団法人日本歯科衛生士会

共催：一般社団法人岩手県歯科衛生士会

後援：岩手県／盛岡市／一般社団法人岩手県歯科医師会

「日本歯科衛生学会 第16回学術大会」が、2021年9月18日(土)～30日(木)の13日間にわたり、新型コロナウイルス感染拡大により緊急事態宣言およびまん延防止等重点措置が発せられている中、感染対策を重視したWeb開催(オンデマンド配信／一部ライブ配信)で行われました。

1,389名の参加があり、開催期間中には約35,000件のアクセスがありました。残念ながら現地を訪れ、会員相互の親交を深めることはできませんでしたが、初めてのWeb開催により、遠方やさまざまなライフステージの会員も参加が可能となりました。コロナ禍でも講演など11題、口演発表30題、ポスター発表83題、企業協賛セミナー4題、ライブ配信1題のプログラムが組まれ、活発な情報交換や最新情報の入手ができ、参加者は研鑽を深めることができました。

リレー講演「災害歯科保健」と、一般の方々にもご視聴いただいた県民フォーラム「歌声は世界を結ぶ」の内容を本紙でご紹介いたします。



リレー講演「災害歯科保健」－東日本大震災から10年間の実践とこれからの方向性－

講演1

東日本大震災における岩手県歯科衛生士会の 災害歯科保健活動から学んだこと

岩手県歯科衛生士会 会長 晴山 婦美子 氏



岩手県歯科衛生士会の会員が、岩手県歯科医師会と連携をとりながら、東日本大震災の混乱の中で実施した災害歯科保健活動のシビアな現状が報告されました。平時より歯科医師会と連携すること、安否確認のための連絡体制を整えておくことなど、日頃の備えの重要性を考えさせられる内容でした。基本姿勢として、常に被災者の心情に配慮し、思いに耳を傾けて寄り添いながら活動することが大切であるという印象的な講演でした。

講演2

日本歯科衛生士会における災害歯科保健活動

日本歯科衛生士会 副会長 久保山 裕子 氏



東日本大震災時、日本歯科衛生士会は災害時緊急支援対策本部を立ち上げました。実際に活動した歯科衛生士の報告書から、マニュアル作成や人材育成の必要性が明確になりました。災害支援活動マニュアルが改訂を重ねながら作成された経緯、研修制度の整備について報告があり、災害対策を疑似体験するツール(DHUGⅢ)の紹介がありました。これには、開催マニュアルなども作成されており、災害に対応する体制や連携を強化していくために、各都道府県歯科衛生士会で活用され広まっていくことが期待されます。

DHUGⅢ：https://www.jdha.or.jp/hisaichi/hisaichi_kenshu.html



講演3

災害歯科支援における歯科医師会の役割

日本歯科医師会 災害時対策・警察歯科総合検討会議委員

岩手県歯科医師会 専務理事 大黒 英貴 氏



東日本大震災発生から現在に至るまでの、災害歯科支援における歯科医師会での活動および連携の実際が語されました。災害時の歯科医療支援は、身元確認、外傷・歯痛に代表される救急処置、誤嚥性肺炎予防のための口腔衛生管理指導など、医療・保健・福祉活動の全てのフェーズにおいて重要な役割を果たします。日頃から地域歯科医療の重要性を関係組織に啓発することや、災害時対応の基準となる法整備のなかに歯科的な文言が追加されるよう働きかけることが歯科医師会としての役割であると説明されました。

講演4

全国統一された災害歯科保健体制の構築と、多職種との連携の重要性

東京医科歯科大学 中久木 康一 氏



日本各地で起こりうる豪雨や地震などの災害時の避難生活における肺炎予防に向け、統一された歯科保健体制の構築や多職種との連携に関する活動の現状と課題について講演されました。災害時に効率かつ迅速に歯科医療を提供できるよう、災害歯科保健医療連絡協議会を軸とした歯科関係団体間の連携を強化すること、「食べる」機能に着目した汎用性のあるアセスメントの使用などにより多職種が連携すること、いずれにおいても災害前からの研修および連携体制の整備が必要であるとお話しされました。

日本歯科医師会HP・災害歯科保健医療連絡協議会：<https://www.jda.or.jp/dentist/disaster/#sec00>

講演5

東日本大震災から10年間の研究からわかったこと

岩手医科大学 歯学部口腔医学講座 教授 岸 光男 氏



2011年の東日本大震災後の口腔保健状況の変化を、10年コホート研究の結果を基に報告されました。被害が最も大きかった岩手県大槌町の住民2,000名への歯科医療職による口腔内調査と口腔関連QOL質問紙調査により、主観的および客観的に口腔保健状況の追跡調査が実施されました。震災直後は主観的にも客観的にも口腔保健状況は良い状態ではなかったものの、2015年には状態が著明に改善し、その後、大きな変化なく維持していました。この口腔保健状況の変化の背景には、歯科診療所の再建を含む地域の復興と医療費免除制度による予防的受診の影響があると推察され、「口腔保健単独で復興するものではなく、地域全体の復興に伴い復興する」と説明されました。

また、震災直後の口腔保健状況の悪化には、歯科用支援物資が自宅避難者や高齢者には届いていないという要因が挙げられ、今後の災害歯科保健の課題も示されました。今年度以降の医療費免除制度の停止による口腔保健状況への影響を考え、今後も対象地域への関与を続けていきたいと講演を終えられました。

総合討論

中久木氏の進行で災害支援に関する討論と、今後の方向性について各氏からの話がありました。岸氏は災害時の歯科保健医療支援の方法も大事ですが、自立していくための方法も大事です。歯科保健医療の関係者が被災したときにどのような援助を求めるべきか、効率的な方法で復旧できるかといったノウハウを持ち、自助できる能力育成が必要ではないかと話されました。大黒氏は、災害対応で大事なことは、日頃から行政、大学、歯科医師会、歯科衛生士会という関係団体が良い関係で、国や地方自治体で事業を行っていることが災害対応に結びついていくと話されました。晴山氏は、災害時の支援には地域歯科保健の歯科衛生士だけでなく臨床の歯科衛生士も多く関わっており、歯科衛生士は何かの役に立ちたいという気持ちが大きいです。普段の歯科保健活動や臨床の中で臨機応変に対応できる歯科衛生士であれば災害時に十分対応できると話されました。久保山氏より、いつどこで災害が起るかわからない時代となり、歯科衛生士が災害時に役に立つ組織づくりをしていきたいと考えています。そのことを地域住民にアピールすることも大切です。災害時の初期対応はその地域でしか対応できないことが多く、勤務先や住まいのあるところで仲間づくりをして、被災した方の食べることを守り、支援できる歯科衛生士になっていきたいと思うと締めくられました。

(日本歯科衛生学会 編集委員会 副委員長 新井 恵)

県民フォーラム

歌声は世界を結ぶ

岩手県立不来方高等学校 音楽部 顧問 村松 玲子 氏

会期中のプログラムで、一般の方々も参加して行われる「県民フォーラム」は、学会のWeb開催に伴い、初めての「Web県民フォーラム」となりました。

講演と共に音楽部のみなさんの素晴らしい歌声を全国のみなさまにお届けでき、オンデマンド配信ならではの楽しみ方ができました。

村松氏の講演は、「合唱コンクール全国大会の指揮台に立つ」という高校時代の夢の話から始まりました。コンクールは音楽を追求していく喜びがあり、結果にはこだわらず、頑張れる自分と、生徒との出会いを共有し、自分を磨く場であると語られています。日本一を目指すにふさわしい集団として、道に迷ったら険しい方を選ぶという言葉に、全日本合唱コンクール最優秀賞受賞の強豪校に導いた村松氏の指導力を感じることができました。

次の「自分の合唱団を海外公演に連れていく」という夢は23年目にかない、演奏旅行の様子をご紹介いただきました。音楽だけが世界語で、平和の祈りであり、音楽で海外の見知らぬ人々と心がひとつになり「音楽は幸せの魔法」と語られました。

岩手県内各地でのコンサートも多く、県民は心待ちにしています。2011年の東日本大震災の際は、ふるさと復興への祈りを込めて歌うことが使命と考え、沿岸被災地を訪問されました。悲しみのあまり固まった心をとかす力が音楽にはあると信じて歌ってきましたが、逆に被災地の方々の力強さに励

まされたと語られ、胸が熱くなりました。

歌うことが許されないコロナ禍の今。

「険しい道を選ぼう」と言っていたのにその道がなくなってしまった今。「変えられないものをなげくより、変えられることを見つけましょう」という言葉に、コロナ禍の生活で、よどみがちな心が晴れました。そして、不可能の反対は可能ではなく「挑戦」であり、ピンチをチャンスに変えていきたいと語られ、たくさんのエールをいただいた講演となりました。

(一般社団法人岩手県歯科衛生士会 会長 晴山 婦美子)



PROFILE

村松 玲子

岩手県立不来方高等学校教頭兼主任指導主事

盛岡市生まれ。東京学芸大学教育学部特別教科(音楽)教員養成課程卒業。青山養護学校・軽米高校を経て不来方高校に赴任、音楽部顧問として32年間指導にあたる。全日本合唱コンクール全国大会出場26回(金賞20回、うち文部大臣奨励賞7回受賞)。海外公演11回(フランス・イタリア・シンガポール・オーストラリア)。県内外での訪問コンサートや東日本大震災被災地での復興支援コンサートを開催。

岩手県教育表彰(学校教育事績顕著者) 文部科学大臣優秀教職員表彰 岩手県高等学校文化連盟功労賞 岩手県芸術文化協会表彰 文化庁長官表彰 矢巾町町民栄誉賞。